農 業 技 術 情 報

令和８年７月15日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター
十勝東部支所　015-572-3128
ＪＡ十勝池田町　572-3131
高島支所　573-2111
池田町産業振興課　572-3118

農作物の生育･作業の遅速(7月15日現在)　　( )内は平年値

作　物　名	遅速日数	生　育　状　況		農作業状況
秋まき小麦	-1	稈長　81.0 (77.0)cm 穂長　9.0 (8.8)cm 茎数　803 (628)本/㎡	乳熟期 6/23 (6/26) 成熟期 7/17 (7/16)	収穫始 (7/18) 収穫期 (7/23) 収穫終 (7/26)
ばれいしょ	+3	茎長　75.0 (85.1)cm 茎数　3.4 (3.5)本	開花期 6/24 (6/26) 終花期 (7/21)	
大豆	±0	茎長　57.2 (52.9)cm 葉数　8.0 (7.7)枚	開花始 7/13 (7/13) 開花期 7/15 (7/15)	
小豆	+1	茎長　22.6 (20.2) 葉数　6.5 (6.3)	開花始 (7/22) 開花期 (7/24)	
菜豆（金時）	±0	茎長　35.3 (39.7) 葉数　3.5 (3.9)	開花始 7/10 (7/10) 開花期 7/12 (7/12)	
菜豆（手亡）	-1	茎長　36.8 (38.1) 葉数　6.7 (6.2)	開花始 7/15 (7/14) 開花期 7/17 (7/16)	
てん菜（直播）	+2	草丈 55.1 (49.8)cm　葉数 21.3 (19.3)枚 根周 18.9 (18.6)cm		
牧　草	+1	草丈 32.4 (30.8)cm		収穫終 7/5 (7/10)
サイレージ用とうもろこし	+1	草丈 174.5 (169.1)cm 出葉数 14.3 (14.1)枚	雄穂抽出 (7/25) 絹糸抽出 (7/27)	
たまねぎ	-	草丈 91.9 cm　生葉数 10.6 枚　葉鞘径 23.0 mm　球径 4.8 cm		

＜秋まき小麦＞

1 収穫前の管理

（１）収穫作業に向けて

・コンバインによる収穫作業がスムーズに行えるよう、ほ場周辺の枝払いや草刈りを実施しましょう。

・ほ場内に雑草が繁茂している場合、倒伏の助長、他ほ場への種子の持ち込み等が懸念されるため、株ごと抜き取り、ほ場外へ持ち出しましょう。

・過去にそばを作付けたほ場や前作が春まき小麦の場合、収穫物にこれらの子実が異物として混入（コンタミ）する恐れがあるため、収穫前の抜き取りを徹底しましょう。

・倒伏した小麦は低アミロや細麦となりやすいため、品質向上のために収穫時に正常な麦と混ぜないように努めましょう。

2 収穫後の管理

（1）麦稈の処理

ア　立枯病や条斑病など土壌病害が発生したほ場では、病気のまん延を防ぐため、麦稈をすき込まずに持ち出しましょう。また、２～３年は麦の作付けを避けましょう。

イ　麦稈をすき込む場合は、窒素流亡による環境負荷を低減するため、流亡しやすい速効性窒素肥料の施用を避けましょう。流亡しにくい緩効性の石灰窒素を利用する場合でも、過度な施用は避けてください。後作に緑肥を栽培する場合は、窒素肥料の施用が必要となりますが、同様に窒素流亡による環境負荷にご留意ください。

ウ　そば・麦異品種の後作に麦の作付は避けてください。やむを得ず作付けする場合は、前植物残渣は搬出しロータリーをかけ、出芽した後に、プラウで埋設して下さい。

エ　ロールベーラで作業する場合は事前に整備点検を行い、作業開始前に駆動部周辺のわらや牧草のくずをきれいに取り除くなど、火災発生防止を心がけてください。

（2）多年生雑草対策

レッドトップ・シバムギ・ギシギシなど多年生雑草が多い小麦畑が散見されます。多年生雑草対策には耕起前の除草剤茎葉処理が有効です。

【多年生雑草の処理方法(グリホサート系除草剤】
小麦収穫 → 雑草が 15cm 以上再生 → 除草剤散布 → 20 日程度放置 → 耕起

表２　耕起前の除草剤例

農薬名	RAC コード	処理方法・使用時期	薬量（ml/10a）	回数	注意事項
タッチダウンｉQ	9	一年生イネ科雑草 耕起または播種前 （雑草生育期）	250～500	１回	・多年生イネ科雑草が15cm以上再生してから散布する。 ・展着剤を加用しない。 ・散布後6時間は降雨がない日に散布。 （ラウンドアップマックスロードは１時間、タッチダウンiQは３時間） ・周辺作物に飛散しないよう注意するとともにドリフト低減ノズルの使用が望ましい。 ・少水量散布は専用ノズルを使用。
		多年生イネ科雑草 耕起３日前以前 （雑草生育期）	500～1,000		
ラウンドアップマックスロード	9	耕起前・雑草生育期 水量25～100ℓ	200～500	３回	
クサトリキング	9	多年生イネ科雑草 耕起または播種前まで （雑草生育期草丈30cm以下）	250～1,000	３回	
		多年生雑草 耕起７日前まで （雑草生育期草丈30cm以下）	500～1,000		

（3）収穫跡地の後作緑肥作付

地力の維持増進のため、小麦収穫跡地には緑肥作物を作付けしましょう。後作にながいも・ごぼうなどを作付けする場合は、キタネグサレセンチュウ対策のため、えん麦野生種が有効です。えん麦野生種は、ばれいしょのそうか病軽減効果や小豆落葉病の抑制効果もありますが、近年、「えん麦いもち病」による減収が問題になっています。

「えん麦いもち病」は、調査事例から以下の対策が考えられます。

・粗大有機物の補給など、収量目的の場合は、えん麦一般種を栽培しましょう。

・えん麦野生種は、は種時期を遅らせると発生しにくい傾向がありますが、キタネグサレセンチュウ対策のため最低でも２か月の育成期間が必要になります。また、多肥を避け、特に地力があるほ場では減肥すると発生しにくくなります。
・センチュウ対策が主目的の場合、同様の効果が期待できる「ネマレット」の栽培が有効です。

表３　小麦後作緑肥の栽培例（北海道緑肥作物等栽培指針を一部改訂）

緑肥作物名	は種時期	は種量(kg/10a)	施肥量(kg/10a)			すき込み時期
			窒素	リン酸	カリ	
えん麦（一般）	８月上～中旬	15～20	４～６	５～10	０～５	10月中旬～10月下旬
えん麦野生種（ヘイオーツ、サイヤー）		10～20	５	５	０～５	
シロカラシ類(キカラシ)※１、２	８月上～下旬	２	５～８	５～10	０～７	
ひまわり(りん蔵）※２	８月上～下旬	1.5～２	４～６	８～10	０～10	
ネマレット　※３	６月上～８月上旬	３～４	６～10	６～10	０～10	

※１・そうか病発生ほ場では前作として用いない。
・根こぶ病発生の恐れがあるので、前作又は後作にアブラナ科野菜の作付けはしない。
※２ キタネコブセンチュウやキタネグサレセンチュウの密度を高めるので、後作物の選定に注意する。
※３ ネマレットは暖地型の作物なので、8月中旬以降のは種では生育が劣る場合があります。

＜ばれいしょ＞

高温多湿になると軟腐病の被害も懸念されますので、ほ場観察に基づき適正な防除を実施して下さい。

1 疫病の防除について

本年は疫病の発生期は「早」、発生量は「並」と予想されています(北海道病害虫防除所「７月予報」)。引き続きローテーション防除を行い、降雨に応じた薬剤選択をしましょう。降雨等でほ場に入れない状況が予想される場合は、Wインターバル（14日間隔）効果のある薬剤（表４※）の使用を検討してください。

2 夏疫病の防除について

夏疫病は多湿と高温乾燥が繰り返されると発生が多くなります。夏疫病に登録のある薬剤を選定し、疫病と同時防除を行いましょう。

表４　疫病の防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用倍率	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）	効果の発現	対象病害(倍)		
						夏疫病	菌核病	塊茎腐敗
ホライズンDF	27、11	1,000～2,500倍	14日	4回	予防・治療	1,500	―	―
プロポーズ顆粒水和剤	40、M5	750～1,000倍	7日	5回	予防・治療	1,000	―	750～1,000
エキナイン顆粒水和剤	27、40	2,000～3,000倍	7日	4回	予防・治療	―	―	―
フロンサイドSC	29	1,000～2,000倍	7日	4回	予防	2,000	1,000	1,000
ランマンフロアブル	21	1,000～2,000倍	7日	4回	予防	―	―	1,500
レーバスフロアブル	40	1,500～2,000倍	7日	2回	予防・治療	―	―	1,500

※Wインターバル効果のある薬剤：「リライアブルフロアブル800倍」、「プロポーズ顆粒水和剤750倍」、「レーバスフロアブル1,500倍」、「ランマンフロアブル1,000倍」、「フロンサイドＳＣ1,500倍」（平成25年度指導参考）。

3 軟腐病の防除

本年は軟腐病の発生量は「並」と予想されています。（北海道病害虫防除所「７月予報」）高温多湿条件が続くと軟腐病が発生しやすい環境となるため注意しましょう。

初期防除の徹底に心がけ、また生育量に応じて散布水量を調節しましょう。

表５　軟腐病の防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用倍率	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）	効果の発現
スターナ水和剤	31※1	1,000倍	７日	５回	予防・治療
バクテサイド水和剤	41、25※2、M1	750～1,000倍	７日	５回	予防・治療
カスミンボルドー	24、M1	500～800倍	７日	３回	予防・治療
マスタピース水和剤	生物農薬	1,000～2,000倍	前日	―	予防

※１ オキソリニック酸（RACコード31）に対する低感受性菌が出現している地域があるので、連用は避ける。また、オキソリニック酸を含む剤の使用は合計５回までとする。

※２ ストレプトマイシン（RACコード25）を含む剤の使用は合計５回までとする。

4 アブラムシ類等防除

本年のアブラムシの発生は発生期が「早」、発生量は「多」と予想されています（北海道病害虫防除所「７月予報」）。害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。

表６ 害虫防除薬剤例

	農薬名	対象害虫		RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
		アブラムシ類	オオジュウニヤホシテントウ				
７月４週	アドマイヤー顆粒水和剤	◎（ジャガ/モモ/ワタ）	◎ 15,000倍	4A	5,000～15,000	14日	２回
８月１週	ウララＤＦ	◎（ジャガ/モモ/ワタ）	―	29	2,000～4,000	７日	２回

5 茎葉処理

（１）薬剤処理による方法

茎葉枯凋剤の散布は塊茎が目標の大きさに達した時期で晴天無風の日を選んで散布してください。

表７　茎葉枯凋処理剤

農薬名	使用量 (ml/10a)	水量 (ﾘｯﾄﾙ/10a)	使用時期	使用回数 (以内)
デシカン乳剤	250～450	100	茎葉黄変始～収穫３日前まで	２回

※接触剤のため茎葉にまんべんなく薬剤を付着させる。

※茎葉黄変期前に使用した場合、枯凋が不完全になる場合がある。

※処理後２～３時間以内に、降雨が予想される場合には使用を避ける。

※生理的ストレスにより維管束褐変を生じやすいので、土壌が極端に乾燥しているときは使用を避ける。

※散布の際はドリフトを起こさないように注意する。

（２）リーフチョッパーによる方法

リーフチョッパーを使用する場合は以下のことに注意してください。

・茎葉処理作業は茎葉黄変期後の好天時に作業する。

・塊茎の損傷や緑化防止のため、刈取り高さは培土を崩さないよう地表から余裕をもたせて処理する。

・後部に石れきが飛散しやすく危険なので、周囲に人がいないことを確認後処理する。

＜豆類＞

1 大豆のべと病防除

「黒大豆」、「トヨムスメ」、「音更大袖」はべと病抵抗性がないため、特に発生状況に注意し防除を実施してください。その他の品種についても要防除水準に達した場合は防除が必要です。開花始に上位葉を確認し、適正に防除しましょう。

べと病の要防除水準

開花始の上位葉の病斑面積率２．５％以上（病斑個数 30 個/葉、葉全体に病斑）

防除時期の目安

開花２～３週間前に要防除水準に達した場合

⇒ 要防除水準に達した時期とその２～３週間後の２回防除。

開花始に要防除水準に達していない場合

⇒ 黒大豆は開花期１回防除が必要　　トヨムスメ、音更大袖は防除不要

表8 大豆べと病の防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
プロポーズ顆粒水和剤	40、M５	1,000	21日	２回
フェスティバルC水和剤	40、M１	600	７日	３回
ランマンフロアブル	21	1,000～2,000	７日	３回

2 大豆の菌核病防除

開花始後 10～15 日目に第１回散布をし、２回目以降は発生状況に応じて 10 日毎に防除しましょう。

表９ 大豆菌核病の防除薬剤例

農薬名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）	備考
トップジンM水和剤	1	700～1,000	14日	４回	紫斑病に登録あり
ファンタジスタ顆粒水和剤	11	2,000	7日	３回	紫斑病に2,000～4,000倍で登録あり

3 大豆のマメシンクイガ･カメムシの防除

１回目防除の目安は、①成虫初発と②莢伸長始（およそ半分の株に２～３cmの莢が認められた日）両方が確認されたら、その６日後頃です。莢伸長始を観察し適期に防除しましょう。２回目防除は１回目の７～10 日後に防除します。

トクチオン乳剤・ゲットアウト WDG はカメムシ類との同時防除が可能です（表 10）。

表 10 マメシンクイガ・カメムシの防除体系例

回目	目安月日	農薬名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
①	8月上旬	プレバソンフロアブル５	28	4,000	７日	２回
②	①の10日後	トクチオン乳剤	1B	1,000	30日	３回

※甲虫類（コガネムシ等）の食害が目立つ場合は、有機リン剤を使用しましょう。

4 大豆の鱗翅目害虫防除

今後の気温により発生量が増えてくる可能性があります。食害面積が20%を超えると５%程度の減収となるため、食害状況を確認しましょう。

加害時期は、
第１期：６月下旬～７月下旬
第２期：８月上旬～９月上旬
第２期の発生では葉の食害も多く、莢も食害し被害が大きくなるので特に注意しましょう。

防除基準（大豆１個体あたり）
- ✓ 開花前　幼虫１頭以上
- ✓ 開花期頃　２頭以上
- ✓ 莢伸長期以降　３頭以上

上記の発生頭数が確認されたら防除実施

表 11　食葉性鱗翅目防除薬剤（大豆）

農薬名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
トクチオン乳剤	1B	1,000	30日	３回
エルサン乳剤	1B	1,000	７日	２回

5 小豆･菜豆の病害虫防除

（１）炭そ病の防除（小豆・菜豆）

７月からの多雨・多湿時に発病が多くなります。ほ場を良く観察し、発生初期から防除に努めましょう（表 12）。

※「雪手亡」「絹てぼう」「白つむぎ」は抵抗性があるため防除不要

（２）菌核病、灰色かび病の防除（小豆・菜豆）

開花後に曇雨天が続くと発病しやすくなります。ほ場の生育に合わせて、適期防除に努めてください。

◎ 小豆防除適期　１回目:開花始後７～10 日目　２回目:１回目防除の 10 日後
◎ 菜豆防除適期　１回目:開花始後５～７日目　２回目:１回目防除の 10 日後

表 12　小豆・菜豆　菌核病、灰色かび病を中心とした防除例

回数	農薬名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
１回目	ミギワ10フロアブル	52	1,000	７日	３回
２回目	パレード20フロアブル	7	2,000～4,000	前日	３回
３回目	ファンタジスタ顆粒水和剤	11	2,000	７日	３回
	または プライア水和剤	10，1	1,000	14日	４回

※菜豆類は病害の発生が多い場合、３回目を検討する。

（３）アブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除（小豆）

マメアブラムシは発生状況に応じて防除してください。

アズキノメイガは開花始の７～10 日後に薬剤散布を行ってください。

表 13　小豆のアブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除薬剤例

農薬名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）	アブラムシ類	ツメクサガ	アズキノメイガ	ハダニ類	マキバカスミカメ
モスピランＳＬ液剤	4A	2,000～4,000	14日	３回	●		● 2,000倍		
ゲットアウトＷＤＧ	3A	3,000	７日	３回	●		●		
ペイオフＭＥ液剤	3A	2,000	７日	３回	●		●		
スミチオン乳剤	1B	1,000	21日	４回	●		●	ﾅﾐﾊﾀﾞﾆ ○	●
プレバソンフロアブル５	28	4,000	７日	２回			●		
トクチオン乳剤	1B	1,000	30日	２回		●	●	●	
ウララDF	29	4,000	７日	２回	●				
ダニトロンフロアブル	21A	1,000～2,000	７日	１回				●	

※スミチオン乳剤のナミハダニは、道ガイドに掲載なし

＜てんさい＞

1 褐斑病の防除

初発が確認されています。ほ場の発病状況を確認し、発生初期の防除を遅れず実施しましょう。

また、ＤＭＩ剤（RAC コード:３）およびカスガマイシン剤（RAC コード:24）は道内で広く耐性菌の発生が確認されています。可能な限り使用回数を低減してください。

表 14　褐斑病防除例

防除時期	農薬名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）	薬剤特性
7月15日	ムケツDX	M3、11A	500～800	21日	３回	予治
8月１日	マンゼブ剤	M3	400～500	21日	５回	予
8月10日	どさんこスター水和剤	3、M3	500	21日	４回	予治

※マンゼブ（RACコード M3）の総使用回数は５回まで

2 ヨトウガ防除

ヨトウガの食害が散見されています。RAC コード別系統剤による輪番防除を実施し、連用とならないよう予防防除を実施しましょう。

3 葉腐病の防除

葉腐病は高温多湿条件で多発します。

発生が見られたら直ちに防除を行ってください。

表 15　葉腐病の防除薬剤例

農　　薬　　名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
モンカットフロアブル４０	7	1,000	７日	５回
リンバー顆粒水和剤	7	4,000	７日	３回

野　菜

＜たまねぎ＞

（1） 軟腐病など細菌病の防除

高温(25℃以上)多湿傾向で軟腐病の発生が懸念されます。また、降雨や虫の食害など傷ついたところから軟腐病が感染しやすくなります。

高温多湿下での銅剤による防除は薬害が心配されますので、必要に応じて抗生物質系殺菌剤を使用するなどして防除を実施してください。

◎薬剤防除以外の細菌性病害対策

・茎葉を傷つける恐れがあるため、手取り除草を控える。

・軟弱徒長する恐れがあるため、肥大期以降の追肥は控える。

◎銅剤使用時の注意点

・薬害軽減のため、クレフノン 200 倍を加用し、葉面散布剤との混用は避ける。

・高温多湿時の使用は避ける。

表16 たまねぎ病害の防除例（YES！clean）

使用時期	農薬名	使用濃度（倍）	使用時期	使用回数	成分回数	白斑葉枯病	小菌核病	軟腐病
７月下旬	ファンタジスタ顆粒水和剤	2,000	収穫前日	５回以内	１回	○	○	
	コサイド3000	1,000～2,000	―	―	０回			○
８月上旬	シルバキュアフロアブル	2,000	収穫前日	３回以内	１回	○	○	
	アグレプト液剤	1,000	収穫７日前	５回以内	０回			○
根切り直後	スミレックス水和剤	1,000	収穫前日	５回以内	１回	貯蔵腐敗病		
収穫直前	トップジンM水和剤	500～1,000	収穫前日	５回以内	１回			

(2) ネギアザミウマの防除

発生量が多くなってきており、小麦収穫に伴い近隣ほ場へのアザミウマ類の侵入が心配されます。<u>たまねぎや葉菜類では小麦収穫前後に防除を実施してください。</u>

表 17 ネギアザミウマの防除例（YES！clean）

使用時期	農薬名	使用濃度（倍）	使用時期	使用回数	成分回数
７月下旬	トクチオン乳剤	1,000	収穫７日前	４回以内	１回

(3) 根切り作業

7月下旬に入ると倒伏期を迎えます。倒伏後は適期根切りにより品質向上を図ってください。根切りの目的は、変形、裂皮、皮ムケ防止や均一な枯葉、着色促進による品質の向上です。適期に根切りを行い、品質低下を防ぎましょう。

高温で日差しの強い日は、日焼けが生じる恐れがあるため作業を見合わせましょう。

○根切り時期の目安

早生品種	北はやて2号、アローベア、 バレットベア、オホーツク222	倒伏揃から5～7日後
中生・中晩生	北もみじ 2000、ブラウンベア、イコル	倒伏揃から 10～14日後

※「倒伏揃」…茎葉が 80～90%倒伏した時期。

○土壌が乾燥した晴天日に行う。(高温時は避ける)

○枕地を手掘りして寄せる場合は、茎葉で球を覆い長期間放置しない。

○降雨により収穫が遅れた場合は、二次発根・生長を防ぐため再度根切りを行う。

(4) 収穫作業

収穫時の条件が悪いと、土砂の付着により品質低下を招きます。ほ場状態をよく観察してから作業しましょう。

根切り後は茎葉が枯葉し首部の仕上がりを確認したら早めに収穫を行ってください。

・収穫の前日か当日に、土砂の付着による品質低下を防ぐため、デガー処理を行う。
・作業機の速度は上げずに低回転で作業する。
・収穫後のコンテナは、搬出しやすい排水良好な場所で風乾してください。
・タッピングは首部が十分乾燥してから行ってください。

＜ヤマノイモ＞

(1) 分肥の施用時期(とかち太郎)

・分肥を行う場合は、7月下旬までに実施してください。また、過剰な分肥や多肥ほ場における分肥は、黄変期の遅れによる乾物率低下の原因になるため注意が必要です。

＜かぼちゃ＞

（1）うどんこ病・疫病の防除

うどんこ病は初発までの予防防除が効果的です。

表18 防除薬剤例

防除時期	対象病害	農薬名	使用濃度（倍）	使用時期	使用回数
７月下旬	うどんこ病	ダコニールエース	1,500	収穫７日前	３回以内
	疫病	アリエッティ水和剤	400	収穫前日	３回以内

～　熱中症に注意しましょう　～

★単独作業は避けましょう

なるべく２人以上で作業し、時間を決めて声をかけあったり、異常がないか確認しあうようにしましょう。

★休憩＆水分補給しましょう

涼しい日陰やテントなどで作業着を脱ぎ、体温を下げましょう。

のどがかわいていなくても、20 分おきに毎回コップ１～２杯以上を目安に水分補給しましょう。

★熱中症対策アイテムを活用しましょう

ファン付きウェアなどの対策アイテムを活用しましょう。

収穫時の待機所では、充電式のミストファンなどで対策しましょう。

夏場の農作業にあたって

★農薬散布において、「農薬の安全使用基準」を遵守し、散布の高さを低くし周辺作物への飛散防止に努めましょう。

★散布時は、必ず防除用マスクを身に付け、肌をしっかり覆うようにしましょう。散布が終わったら、肌の露出部を良く洗い、うがいをしましょう。

★作業機の連結時での「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に、十分注意しましょう。

★水分と塩分をしっかりとり、熱中症に注意しましょう

※薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

※薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。